

修士論文(要旨)

2015年1月

「てしまう」とその縮約形「ちゃう」の研究
— 評価的意味を中心に —

指導 新屋映子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

213J3023

黄 麗

Master's Thesis (Abstract)

January 2015

A Study of "-Te Shimau" and its Contracted Form "-Chau": Focusing on Their Evaluative Meanings

Huang Li

213J3023

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Teruko Shinya

目次

第1章 序論

- 1.1 研究背景
- 1.2 研究動機
- 1.3 研究目的

第2章 先行研究及びその検討

- 2.1 「てしまう」の意味に関する研究
 - 2.1.1 金田一春彦(1955)、高橋太郎(1969)、吉川武時(1973)
 - 2.1.2 北原美紗子(1977)
 - 2.1.3 寺村秀夫(1984)
 - 2.1.4 倉持保男(2000)
- 2.2 「てしまう」に関する通時的研究
 - 2.2.1 田中章夫(2007)
 - 2.2.2 梁井久江(2005)
- 2.3 先行研究のまとめ

第3章 研究方法

- 3.1 教科書調査
- 3.2 辞書調査
- 3.3 コーパス調査
 - 3.3.1 コーパスの概要
 - 3.3.2 検索項目
 - 3.3.3 例文の分類

第4章 調査結果及び分析

- 4.1 調査結果
 - 4.1.1 教科書の調査結果
 - 4.1.2 辞書の調査結果
 - 4.1.3 コーパスの調査結果
 - 4.1.3.1 現代日本語書き言葉均衡コーパスの調査結果
 - 4.1.3.2 青空文庫コーパスの調査結果
 - 4.1.3.3 大系本文コーパスの調査結果
 - 4.1.3.4 コーパス調査結果のまとめ
- 4.2 分析

- 4.2.1 現代日本語書き言葉均衡コーパスの例文分析
- 4.2.2 青空文庫コーパスの例文分析
- 4.2.3 大系本文コーパスの例文分析
- 4.2.4 例文分析のまとめ

第5章 考察

- 5.1 「てしまう」「ちゃう」は誰の評価、感情を表すのか
- 5.2 プラスの評価的意味を持つ文脈と人称の関わり
 - 5.2.1 一人称
 - 5.2.2 一人称相当
- 5.3 いつから、「てしまう」「ちゃう」がプラスの文脈で使用され始めたか。
 - 5.3.1 「てしまう」がプラスの文脈で使用され始めた時期
 - 5.3.2 「ちゃう」がプラスの文脈で使用され始めた時期
- 5.4 日本語教科書における「てしまう」「ちゃう」の検討
- 5.5 マイナスの評価的意味
- 5.6 考察のまとめ

第6章 終章

- 6.1 まとめ
- 6.2 日本語教育への提言
- 6.3 今後の課題

参考文献

第1章 序論

中国で日本語教科書を主な学習リソースとしていた稿者が、来日後、日本人の話し相手が「ちゃう」を使い、喜んでいる気持ちを表すことが理解できず、戸惑ってしまった経験から、「ちゃう」と「てしまう」がマイナスのイメージのみならず、プラスの文脈の中でも使われ得るのかという問題意識を抱くようになった。

第2章 先行研究及びその検討

「てしまう」に関する研究はこれまで数多く出されている。例えば、金田一(1955)、高橋(1969)、吉川(1973)、北原(1977)、寺村(1984)、石川(1992)、倉持(2000)、金水(2002)、梁井(2005)などが挙げられる。これらの研究はほとんどが「てしまう」と「ちゃう」のマイナスの評価的意味のみを指摘している。寺村(1984)、梁井(2005)は「ちゃう」のプラスの評価的意味について述べているが、「てしまう」についての評価的意味には言及していない。倉持(2000)は例文を挙げ、「てしまう」の非マイナス、いわゆるプラスの意味について説明しているが、例文は単一の文であり、文脈がないため、話者の気持ちを把握できず、マイナスかプラスかという評価的な意味は判断しにくい。

そこで、本研究では、以上の研究を踏まえ、文脈の中で、「てしまう」と「ちゃう」の用法を評価的意味という観点から考察していく。

第3章 研究方法

「てしまう」とその縮約形「ちゃう」に関する従来の扱いを考察するために、教科書調査と辞書調査を行った。次に、コーパス(現代日本語書き言葉均衡コーパス、青空文庫コーパス、大系本文コーパス)調査を通して、「てしまう」と「ちゃう」が実際にどのように使用されているかを分析した。

第4章 調査結果及び分析

調査した教科書(指導書)と辞書の両方とも、「てしまう」とその縮約形「ちゃう」について「残念、後悔」というマイナスの評価的意味しか提示していない。コーパス調査、例文分析によって、プラスの文脈を持つ「てしまう」「ちゃう」の例文が見られ、評価的意味は「てしまう」「ちゃう」自体ではなく、それらが置かれる文脈で判断すべきことも明らかになった。

第5章 考察

「てしまう」が誰の評価、感情を表すのかについて分析し、「てしまう」「ちゃう」がプラスの評価的意味を持つ文脈で使用され始めた時期や、その文脈的特徴を考察した。また、日本語教科書における「てしまう」「ちゃう」の説明や、問題点も検討した。

第6章 終章

本研究で明らかにしたのは以下の3点である。

- ① 評価的意味は文脈によって決まること。「てしまう」「ちゃう」で表されるわけではなく、また前接動詞の性質によるわけでもない。
- ② 「てしまう」は江戸時代後期、「ちゃう」は明治時代中期という早い時期に、すでにプラスの評価的意味を持つ文脈で使用されていたこと。
- ③ 「てしまう」「ちゃう」がプラスの文脈で使われる場合、その文は一人称ないし一人称視点で語られていること。

日本語教育において、日本語学習者の円滑なコミュニケーション能力を養うために、日本語教師、特に海外の日本語教師は、学習者に「てしまう」「ちゃう」というとマイナスだというような印象を与えず、教科書の中に書かれていなくても、段階的にプラスの文脈で使う「てしまう」「ちゃう」を導入すべきであり、学生に教科書以外の学習リソースを提供し、日本語の使用実態を紹介すべきではないかと提言した。

最後に、話し言葉における「てしまう」「ちゃう」を考察すること、社会言語学的観点から「てしまう」「ちゃう」の位相などを分析すること、「てしまう」「ちゃう」が多くの場合にマイナスのイメージで使用される原因を探ることを、今後の研究課題にする。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃ほか(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 石川守(1992)「「～てしまう」とその情意表現に関して」『語学研究』69 拓殖大学語学研究所 pp. 89-115
- 一色舞子(2011)「日本語の補助動詞「～てしまう」の文法化：主観化、間主観化を中心に」『日本研究』15 高麗大学日本研究センター pp. 201-221
- 北原美紗子(1977)「自動詞(3)」『岩波講座日本語7文法Ⅱ』岩波書店 pp. 147-178
- 金水敏(2002)「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店 pp. 3-92
- 金田一春彦(1955)「日本語のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X(『日本語動詞のアスペクト』1976 むぎ書房 所収) pp. 27-61
- 久野暉(1978)『談話の文法』大修館書店
- 倉持保男(2000)「補助動詞「(～テ)シマウ」について」『日本語意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』ひつじ書房 pp. 189-300
- 鈴木智美(1998)「「～てしまう」の意味」『日本語教育』97 日本語教育学会 pp. 48-59
- 高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」教育科学研究会文法講座テスト 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 pp. 119-153
- 田中章夫(1986)「東京語の完了表現「行っちゃウ・死んジャッタ」をめぐって」宮地裕編『論集日本語研究1(現代編)』明治書院 pp. 117-136
- 田中章夫(2007)「(行っ)チャッタ/(死ん)ジマッタ」『揺れ動く二ホン語揺れ動く二ホン語』東京堂出版 pp. 191-198
- 張又華(2013)「「テシマウ」構文における話者の感情・評価的意味について—意志性の観点からの考察」児玉一宏・小山哲春編『言語の創発と身体性』山梨正明教授退官記念論文集 ひつじ書房 pp. 463-477
- 角田太作(2009)『世界の言語と日本語改訂版—言語類型論から見た日本語』くろしお出版
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- フォード丹羽順子(2005)「コミュニケーション能力を高める日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp. 105-125
- 丸谷しのぶ・和栗雅子ほか(1998)「「～てしまう」はどのような表現か—その「心理側面」について—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24 pp. 119-131
- 梁井久江(2005)「北関東における「テシマウ相当形式」について」『都大論究(42)』東京都立大学国語国文学会 pp. 12-27
- 梁井久江(2003)「「～テシマウ」と「～チャウ」の相違」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp. 67-72
- 梁井久江(2009)「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5(1) 日本語学会 pp. 15-29
- 吉川武時(1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」Linguistic Communication 9. 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』麦書房 pp. 155-328
- 李徳培(2003)『ちまう・ちやう考—明治時代の使用実態についての社会言語学的研究—』Japanese Technical Publishing Company 出版
- 林青樺(2009)「現代日本語におけるテシマウ文の意味について—事象のあり方との関わりから」『国語学研究』48『国語学研究』刊行会 pp. 30-43
- Suzuki, R. (1999). Language socialization through morphology: The affective suffix -CHAU in Japanese. Journal of Pragmatics, 31, 1423-1441.

参考 URL

JICA(独立行政法人・国際協力機構)

<http://gwweb.jica.go.jp/km/FSubject2301.nsf/VW0101X02W/125CBF92DB160BB94925711B001206E5?OpenDocument&sv=VW0101X15W>
(2015年1月6日最終検索)